

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

寺崎英樹



審査結果

本学博士後期課程に在学する鈴木恵美子氏の提出した学位請求論文「スペイン語の単純過去形と現在完了形の通時的研究」について審査委員会は論文審査と最終試験（公開審査）を行った結果、全員一致して博士（言語学）の学位を授与するのにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は教授寺崎英樹を主査とし、富盛伸夫教授、高垣敏博教授、黒澤直俊教授および学外からスペイン語学専攻の東京大学教養学部上田博人教授の計5名の委員で構成された。

論文の概要および構成

現代スペイン語では直説法単純過去形（canté）と同現在完了形（he cantado）の使い分けに関してスペイン地域とイスパノアメリカ地域との間に相違があることが知られている。本論文は、これら2形式間の機能分担の相違という観点から半島スペイン語とメキシコを中心とするアメリカ・スペイン語とを比較し、時代を追って通時的に文献を調査した研究である。その結果、従来、定説化していたアメリカ・スペイン語の現状をスペイン植民時代の古い様相が残存するアルカイスモ（古語法）とする見方には問題があると結論付けている。

本論文は序論と4章から構成されている。序論では論文の目的、調査方法、使用コーパスおよび論文の構成が述べられている。

第1章「現代半島スペイン語における2形式の機能」では単純過去形と現在完了形について現代の半島スペイン語における基本的な意味と用法を検証し、各形式の時制的・アスペクト的特徴を整理しながら両時制の特徴について規定を行う。その規定に際してはスペイン語の時制体系にアスペクト概念を排除し、時間的關係だけで規定を行おうとするロホ（1999）およびテキスト言語学的に時制を規定するヴァインリヒ（1974）の問題点を批判しながら特に後者については一部概念を資料を扱う上で考慮に入れている。また、2形式と時の副詞との共起関係や親和性が検証されている。

第2章「現代語における2形式の機能分担の地域的バリエーション」では現代スペイン語における2形式の機能分担について地域による変異が考察される。このため半島スペイン語とアメリカ・スペイン語に関してまずケイニー（1970）、カルタヘナ（1999）などの先行研究を調査し、ついでスペインとメキシコの現代戯曲各々2作品における2形式の使用状況を実証的に調査している。その結果、従来から指摘されているように半島スペイン語に比べ、メキシコ・スペイン語では現在完了形よりも単純過去形の使用が優勢であることおよび両地域では2形式の使い分けに相違があることが確認される。ここで指摘される重要な点は、半島スペイン語では2形式を使い分ける際、発話時との関連性の有無が重視され、直前の完了または「拡張された現在」の領域では現在完了が使用されるのに対し、メキシコ・スペイン語では発話時との時間的遠近にかかわらず完結した事象には単純過去が用いられ、発

話時まで事象またはその効力が存続している場合にしか現在完了が用いられないということである。この継続用法への特化はメキシコ・スペイン語の特徴と言えるものである。

第3章「半島スペイン語における単純過去形と現在完了形の通時的変遷」では現代アメリカ・スペイン語に見られる単純過去優位の状況がスペインが植民地進出を行った15世紀末から17世紀の時代の半島スペイン語にも存在したのかどうかを検証する。このためにまずラテン語から中世スペイン語に至る2形式の起源と用法の変遷の過程を概観し、次に前記の時代にスペインで書かれた戯曲形式の作品4点と自伝形式の文学作品1点の実証的な調査が行われる。この結果、特に注目される直前の完了の用法については2形式のどちらも使用され、現代メキシコ・スペイン語に見られるような単純過去優位の状況は認められないこと、またこの場合に現在完了が用いられる頻度はどの作品でもかなり高く、すでにこの形式の主要な用法となっていて、この点でも現代メキシコ・スペイン語の現在完了の状況とは異なることが指摘される。

第4章「植民地時代の文書における単純過去と現在完了形」では植民地時代のアメリカ地域における文書の調査が行われる。この目的のため、初めに植民地時代のメキシコ（ヌエバ・エスパーニャ）の書簡類を集めた文書集の中から16世紀～17世紀の文書44点を分析し、併せてクリオーリョ（現地生まれのスペイン人）の戯曲作品1点の調査を行う。さらに、16世紀から18世紀にかけてのアメリカ地域6都市で書かれた書簡、裁判記録を収集した文書集の文書133点が調査対象に取り上げられる。分析の結果、現代半島スペイン語に特徴的な「拡張された（直前の）過去」の用法で現在完了形が単純過去形よりも優位に立つという現象は見られないこと、逆に現代アメリカ・スペイン語に特徴的な単純過去がこの用法では優位に立つという現象も見られないことが明らかにされる。つまり、植民地時代のアメリカ地域の文書に見られる2形式の使用傾向は同時代の半島スペイン語の状況とほとんど変わらないことが実証される。したがって、現代アメリカ・スペイン語に見られる単純過去形優勢の状況は、植民時代から明瞭に存在したわけではなく、半島と共通の過渡的段階を経て後の時代に形成された可能性があることが示唆される。

第5章「結論」では、現代メキシコ・スペイン語に見られる単純過去形の優勢はスペイン語の移植期当初から明瞭に見られたものではなく、過渡的段階を出発点として後の時代に形成された可能性があること、現在のイベリア半島とアメリカ両地域のスペイン語変種に見られる2形式の使い分けは、どちらの変種をとっても植民地移植期のスペイン語の古い段階と直接的関連性があるとは言えないということが指摘される。

論文の評価

審査委員会は本学で課程博士号を取得するために必要と考えられる諸要件に照らして本論文をどう評価したか、順を追って述べる。

第1に、研究対象の把握と問題設定が明確になされているかどうかという点である。この論文は明快な記述により研究目的と調査方法、展望が述べられており、文献資料の検証に基づいた通時的研究としては緻密さと大胆さの両面を兼ね備えた優れた論文であると言える。具体的には、本論文は単純過去と現在完了が共有すると

考えられる「直前の完了」の用法・意味を中心として、両者の「相関」を時間軸と地理的対比の中で比較して行くという正統的な論証法を取っており、仮説を段階を追って実証していく手法は堅実である。このように2形式を体系内での対立要素としてとらえ、その消長を追求して行く方法は構造主義的ないしは機能主義的通時論の説得力のある実例を提示したと言える。

第2に、対象領域の先行研究を十分に渉猟し、問題設定に従って批判的に継承し得ているかどうかという点である。この論文は、先行研究を十分に参照し、スペイン語学上の定説を明確に踏まえた上でそれに疑問を投げかけ、自分の切り口を設定して論証を進めており、過不足ない適切な記述を行っていると判断される。

第3に、研究方法、コーパスの処理、検証、結論への論述等を含め、言語学的科学性が認められ、かつ独自のものであり、博士論文としての独創性が認められるかどうかという点である。本論文は膨大な言語資料を丹念に読み込んだ上で分析が行われている。メキシコなどアメリカ・スペイン語の2形式の用法は半島スペイン語の古い時代の用法の残存であるという見解は定説化しており、しかも従来それは有力な学者によって直感的に述べられるのが普通であった。これを否定する見解はこれまで皆無だったわけではないが、それは限定された資料を基にした主張であり、この論文のように長期間にわたる文献を綿密に分析した論考は存在しなかった。その意味で、この研究がスペイン語時制の通時的研究に寄与するところは大きい。また、論証のステップに無理がなく、少なくとも問題設定の枠内では十分に説得的である。同時に、文献の分析にあたっては古い文献から新しい文献まで読みこなす鈴木氏の高いスペイン語能力が十分にうかがい知れる。

第4として論文の体裁について目次、注、参考文献などを含め論文の構成が適切であるかどうかである。この論文は全体として適切に構成され、注記の方法には一部改善する余地があるものの本文の記述も言語学論文として適切であると言える。論旨の展開も破綻がなく、日本語の表現にも稚拙なところがなくて読みやすい。

第5として、自立した若手研究者としての素質と将来性が認められるかどうかという点である。鈴木氏は研究の持続的遂行能力、データの処理能力、考察力およびスペイン語の言語能力等、いずれも優れていると認められ、この点でも高い評価が与えられる。

もちろん、本論文にも全く問題がないわけではない。以下、その問題点をあげる。第1に、スペイン語学の境界を越えた他のロマンス諸語の研究成果、あるいは日本語学の特にアスペクト研究についての言及がほとんどないことである。本論文の目的から言えば、枠外ということになるかもしれないが、言語研究としてはより広い視野を取り入れることが望ましい。

第2に、現代語の地域的変異を検討するにあたり、イベリア半島のスペイン語は「半島スペイン語」としてひとまとめにされているが、ガリシアやカタルーニャなど非スペイン語地域は別にして半島内のスペイン語の諸方言についてもっと個別に資料を発掘し、取り上げることが望ましい。

第3に、2形式の用法を検討する際、発話時と断絶した過去、直前の完了など従来から用いられている分類が再検討をした上でほぼそのまま踏襲されているのであるが、研究目的に沿って用法を大胆に分類し直すなど理論的な再検討をさらに試みてもよかったのではないか。

第4に、本論文では2形式の相関という観点から通時的変遷を追っているのであるが、2形式が古い時代に類似した文脈で一見差異なく使用されたとしても形式が異なる以上、意味的に何らかの相違がなかったのだろうかという根源的な問題は残る。したがって、こうした点はさらに細かく検証する必要がある。また、動詞の意味の種類により2形式の選択に相違があるのではないかというより微視的な問題も検討する必要もあるだろう。

第5として、文学作品の分析に際して2形式の使用率が提示されているが、作品の題材や出現場面に相違がある以上、単に比率を示すのではなく、もっと精緻な統計的処理をする必要があるのではないか、また、作品や文書の選び方もより吟味する必要もあるかもしれない。

このように問題点を指摘しようとする余地はあるものの、本論文の目的を超えている点もあり、全体として本論文の本質的な価値を損なうものではない。また、鈴木氏の研究者としての能力に何らの疑義を引き起こすものではない。何よりも評価できることは、2時制の使用に関してアメリカ・スペイン語には半島スペイン語の古用法が残存しているという従来定説化された主張を否定し、当初存在した2形式共存の過渡的な状態から半島とイスパノアメリカでそれぞれ独自の発展を遂げたという新見解を提示したことで、しかもそれをしっかりとした実証的な裏付けの下に示したことである。これはスペイン語学研究にとって大きな貢献であり、本論文は今後この種の時制の通時的研究では必ず引用すべき論考になるものと思われる。近い将来、この論文のエッセンスを欧文で発表するならば、国際的にも寄与するところは大きいし、有益な批判を得てさらに研究を発展させることができるだろうと考えられる。結論として、本論文は内容・構成ともに堅実なものであり、質・量ともに博士論文としての水準を十分に満たしていると判断できる。

以上のような判断から審査委員会は全員異議なく最初に述べた結論に達した次第である。